



(大坂東北部)

大坂城は、一五八三年(天正一一)、豊臣秀吉によって築城が開始され、一六一五年(元和元)の大坂夏の陣によって焼亡落城するまで三十二年間の豊臣氏大坂城と、徳川幕府が一六二〇年(元和六)から一六二九年(寛永六)まで十年の歳月をかけて再建し、現在に残る徳川氏大坂城に大別される。豊臣氏大坂城については、小野清の『大坂城誌』(一八九九年)以来現在まで、絵

大阪・大坂城跡

- 1 所在地 大阪市東区法円坂町一番地
- 2 調査期間 一九八二年(昭五七)七月～十二月
- 3 発掘機関 財大阪市文化財協会
- 4 調査担当者 中尾芳治・木原克司
- 5 遺跡の種類 近世城郭跡
- 6 遺跡の年代 桃山時代～江戸時代
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

図や文献に基づく数多くの研究や考察が行われた結果、本丸・二の丸・三の丸・総構の四重構造をもつものであったことが明らかにされた。ところが豊臣氏大坂城は、大坂夏の陣による焼亡後、徳川氏大坂城の再建工事によって破却・埋没せしめられたために、今日地上にその痕跡を止めていない。したがってその正確な位置や規模・構造についてはほとんど不明のままに残されている。

一方、一九五四年(昭和29)に開始された難波宮跡の発掘調査地域は、豊臣氏大坂城三の丸、徳川氏大坂城の城代・城番・奉行・与力・同心等の屋敷町と重複しており、難波宮跡の調査に伴って大坂城関係遺構の検出や木簡の出土がみられる。

大坂城関係の木簡は、一九五三年(昭和28)初出の一点をはじめとして、(一)難波宮跡第三二次調査(東区上町二丁目 上三病院構内)で二六六、(二)難波宮跡第一二次調査(東区法円坂町 国立大阪病院構内)で一三三、(三)森の宮西之町遺跡(東区森ノ宮中央二丁目)で二一三などの例が知られるが、これらの出土例については次回にまとめて紹介したい。

一九八二年に一九点の木簡の出土した難波宮跡(NW八二―二四四)調査地は、難波宮中軸線の西約四三〇～五〇〇mに位置し、方一kmと推定されている難波宮城の西限であるとともに、豊臣氏大坂城三の丸推定西端上に当る。また江戸時代の各種絵図によると江戸時代を通じて大坂城代下屋敷地となっている。

調査の結果、調査地の北西から南東にかけて、豊臣氏大坂城三の丸外堀と推定される幅約三五mの堀状遺構とそれに伴う石垣跡や建物跡、堀状遺構埋没後の火災痕跡のある土塀跡など、大坂冬・夏の陣にかかわると推定される遺構のほか、松平忠明時代の整地層や再建大坂城に伴う大規模な整地層など、江戸時代後期に至る少なくとも五層以上の遺構面の存在が明らかにされている。

今回出土した木簡一九点のうち一七点が、江戸時代後期の井戸SE〇一からの出土で、棧瓦片、陶磁器、ふいご羽口、ほうろく、壁土、釘、櫛、骨、曲物、箸状木片などが伴出している。一点は同じく江戸時代後期の井戸SE〇二からの出土で、棧瓦片、陶磁器、砥石、スリ鉢、灯明皿、鉄釘、木片、漆器片、ほうろく等が伴出する。後一点は、大坂冬の陣後に埋没したと推定される豊臣氏大坂城三の丸堀内から黄瀬戸片とともに出土したものである。

一点を除いていずれも墨書が認められるが、判読できたのはわずかである。木簡の型式一覧と釈読可能な四点を次に掲げる。釈読にあたっては奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部史料調査室のご協力と鬼頭清明氏のご教示を得た。

8 木簡の釈文・内容

(1) ・「孫□組六右衛門」

・「九郎右衛門」

110×22×4.5 011

出土木簡型式一覧

番号	型式	両面 墨書	片面 墨書	墨書 なし	出土遺構
(1)	011	○			SE01
(2)	019		○		〃
(3)	021	○			〃
(4)	059	○			〃
(5)	081	○			〃
(6)	059	○			〃
(7)	051		○		〃
(8)	039	○			〃
(9)	061		○		〃
(10)	019	○			〃
(11)	051		○		〃
(12)	011	○			〃
(13)	019	○			〃
(14)	051	○			〃
(15)	051			○?	〃
(16)	019	○			〃
(17)	081	○			〃
(18)	051		○		SE02
(19)	019		○		三の丸堀内

(2) 「小松村□左□× (62)×24×2 019

(3) ・豊郡円□□石□や
又左

・未ノ九月十四日
松山組□□門× (131)×30×4 059

(19) 加賀与兵衛 (105)×16×3 019

9 参考文献

木原克司「豊臣・徳川両氏の大坂城検出遺構とそれをめぐる若干の考察」『大阪の歴史』第九号 一九八三年)

(中尾芳治・中川信作)